

第10回風景デザインサロン●開催レポート

第10回風景デザインサロンの実施状況

去る平成20年10月20日(月)に、福岡市薬院にて、第10回風景デザインサロンを開催しました。

- 講師：矢ヶ部 輝明氏((株)建設技術研究所九州支社)
- テーマ：建設コンサルタントと景観デザイン
- 開催時間・場所：18:30~21:00 / I CONE (福岡市薬院)
- 参加人数：17名

本年度第4回目のサロンでは、前半、矢ヶ部氏が携わってこられた事例について簡単な説明とそれら事例から把握された課題についてお話して頂きました。また、後半は建設コンサルタントの現状と課題を整理・分析、そして土木技術者・コンサルタントの将来像についてお話して頂きました。



第10回風景デザインサロンの様子

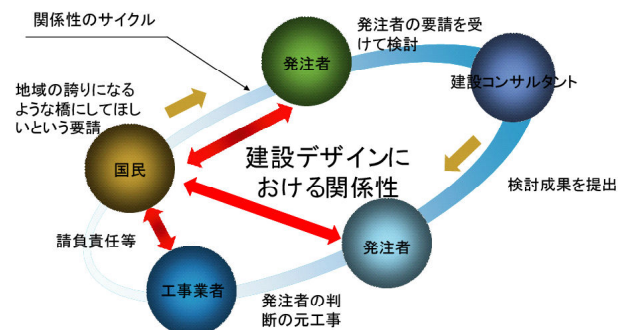
講演内容の骨子

1. 今、省みての景観デザイン上の課題

直方リバーサイドパーク構想の検討、石井樋地区水辺整備構想、鹿児島市石橋公園構想、長崎歴史的ダム保全事業、塩田町コミュニティ道路整備等、様々な公共施設整備に長年携わってきた。今、省みてみると、土木構造物は減価償却期間には壊せないため、デザインに失敗が許されない点、担当者や担当部署、あるいは会社が変わってしまい、問題を取り残したまま議論が進んでしまう点など、景観デザイン上の課題がいくつか抽出された。それら課題も踏まえると、景観デザインにおいて、「自然の力を受け入れるデザイン」が重要だと考える。異なる機能を持ったデザインの足し合わせではうまくいかない。デザインとは、いくつもの機能を満足させる一つの形を作り出すことである。そのために、いくつもの機能が天然に成り立っている自然をうまく利用することが肝要であろう。

2. コンサルタントの現状と課題

まず、建設コンサルタントの業態について理解しなければならない。ハウジング会社のような成果主義の「請負業務」ではなく、成果品を作る際のプロセスに対して対価が支払われる「委託業務」という業態である。検討業務を行うとき、検討内容自体に過失がある場合はコンサルの責任が問われるが、その検討結果をどのように受け入れ、どのように活かすかは発注者の役割であり、その責任も当然発注者にある。この業態から発生する問題として、コンサルも仕事の一部に関わっているものの、仕事自体は行政が行ったものとして処理されるため、報告書等にコンサル名の記載が無いケースも過去には多くあった。さらに裏方に徹している分、国民との距離が遠く責任も薄いという面があり、こういった土壌が建設コンサルタントに悪影響を及ぼしているのではないだろうか。これら問題点から、デザインを検討しているコンサルの担当者の顔と名前をもっと前面にださなければならないと考える。成果の善し悪しよりもプロセスがよければいい、出来の悪いデザインでも検査に通ればいいという考え方では、自らの首を絞める結果に成りかねない。発注者とコンサルがお互いに理解し合い、上がってきた検討成果について十分意見交換し、諸事情を勘案して最終決定するという流れが理想であろう。



デザイン検討における関係主体の構図

3. 土木技術者・コンサルタントの将来像

「公共事業の品質確保の促進に関する法律」(品確法)の施行により、価格競争から脱却し、品質による競争(プロポーザル評価方式)へと転換した。コンサルタントへの業務発注は、今までは積算方式(技術レベル別に必要な技術者数を積み上げる)であったが、今後はより技術提案力が問われるようになることが考えられる。しかしながら、みんながみんな景観デザイン・風景デザインのプロになる必要はない。景観デザインにおける技術者の役割は二通りあり、一つは景観デザイナーといわれるスター的技術者、もう一つはプロとしての技術者集団である。スター的技術者は、土木施設における一種の芸術作品的な美しさを備えたものを造り出す。その他の技術者はプロとして決しておかしなものを造らないように努める。ほとんどの技術者が後者であり、変に懲りすぎずいい出来合いのものを造ることが非常に重要である。現在ではスター的技術者の役割を主に大学の先生方に担っていただいているが、ゆくゆくはコンサルタントの中にそういう存在が生まれればよい。

プロとアマの違いは微妙なところの違いが分かるかどうかで、その違いは最終成果物に大きな違いとなって表れてくるのだろう。土木技術者全員が景観デザインのプロ・デザイナーになるのは無理なこと。しかし、一人一人の技術者が街のおじさんやおばさんたちに、プロ意識をもって、その微妙な点を説明できるようになることは必要なことと思う。

質疑応答

矢ヶ部氏の熱心なご講演の後、質疑応答の時間を設けて意見交換をしました。今回は学生向けのテーマということもあり、学生からの質問を中心に、また風景デザイン研究会の会員メンバーからも多くの質問や感想をいただきました。

主な質疑応答は以下のとおりです。

- 1) (質問) コンサルタントの立場上、発注者と市民との間に入れられないなど、辛いと思った現場体験を教えてください。
(回答) 委託業務につき、行政が住民や有識者への説明を行うケースが多いが、その説明の際に『ここを突かれると痛い』という部分を説明してしまったとき、自分で説明したくてもできないので辛い。委託業務部分に関して説明させていただけるケースも近年増えてきたが、あくまで責任を負うのは発注者であることは変わらない。一方でアットリスク（責任も委託業者が負うシステム）の発注方法もある。保険制度も充実してきたので、いずれはそれらが主流になるかもしれない。
- 2) (質問) コンサルの提案をカタチとして造り出す行程は施工業者が担っていますが、その提案内容を施工業者にうまく伝える方法はありますか？
(回答) 施工者とコンサルで話し合う場を設けることはある。また過去に行った業務の話だが、施工図面にコメントや画像を貼って、図面一枚で多くを伝えようとする努力を試みたことがある。あくまでコンサルティング業務なので現場までは入れていないことが多いが、現場に入れば良いと思う。
- 3) (質問) 色彩についての話もあったが、色彩について考慮した点などはありますか？
(回答) 地元材を使えばいいとかそういうレベルの話はあったが、明度・彩度まで考えた経験はなかった。西山ダムの高欄では色彩がきつい部分も実際ある。山口弘子さんのお話を聞いた際に勉強になった点が非常に多くて、そういったことを早く聞いていればもっと変わっていたかもしれない。塩田町のコミュニティ道路の事例では、イベントとの兼ね合いで色彩が決まったが、色の境界部分にグラデーションを使って和らげるなど、もっと考慮があればよかったと思っている。
- 4) (質問) コンサルタントは、業務という縛りもあるせいで、単純に理想を追い求めるだけではやれない部分もある。その点で NPO では理想を追い求めることができるように思うし、第一線を退いた技術者達が NPO で活躍する例もある。現在ゼネコン・コンサル・行政という三者構造であるが、コンサルにとって NPO は驚異の存在とならないか？
(回答) NPO は、インフォームドコンセントで方向性は示せても責任はもてない。驚異というか、味方になってくれる存在だと思う。地元でなければ引き出せないものがあって、そういう部分を NPO が補ってくれる。我々は技術的に料理をすることが大事で、コンサルタントはプロフェッショナルとして責任をはたさなければならない。
- 5) (質問) 「プロポーザルが主流となってきたので、これからは技術者一人一人の力が求められる」という話があったが、以前のほうがよかったという話があれば聞かせてください。
(回答) 昔は発注者と飲んでいたので、発注者が悩んでいることが感知できた。けれど今は 500 円以上の弁当はダメだとか倫理規定の縛りがあるから、そういうことは出来なくなった。昔は、打ち合わせの後は決まって飲み会で、「俺はこうしたいんだ！」といった本音の議論が出来た。発注者と受注者という関係だけではなく、パートナーという関係でもあった。
- 6) (質問) デザインをする力を身につけるにはどうすればいいか？
(回答) なぜ、どう良いのかを説明できることが大事。そういう意識で物事をみていると見えてくる瞬間がある。英語でも音楽でも、なんでも一緒。
- 3) (質問) 私は部下を指導する立場になってきたが、景観デザインへと部下を導いていく方法とは？
(回答) 私が新入社員のとき、上司から「地元のおばちゃんと話したか？地元で飯食ったか？色んな経験をしてこい。」とよく言われた。また「新幹線で新聞を読むな。風景の移り変わりを見ている。」とも言われた。仕事をするのは当然だが、風景を見るだとかは自分の財産になるんだからしなさい、という意味だったのだろう。元気があるうちは、あちこち見ないといけないと思う。



次回予定

次回サロンの予定は、次のとおりです。皆さん奮ってご参加下さい。

- 講師：木寺佐和記氏、前田秀喜氏、林真希子氏（西日本技術開発（株））
- テーマ：建設コンサルタントと景観デザイン その2
(前原停車場線景観整備プロジェクトで学んだこととその後)
- 開催日時：平成20年11月19日（水）18:30から21:00
- 開催場所：I CONE（福岡市薬院一丁目）予定